

トの採用計画に沿って実験スペース等を確保したうえで、余裕がある場合に運用される。また、承継ポスト間の内部昇進を原則として認めない、という分子研の暗黙のルールは主任研究員を除いてこれからも堅持していく事になると思われる。また、平成29年度から

承継ポストの公募は全て国際公募にしているが、応募者の質の向上がこれからの課題であると感じている。これは新しい人事選考部会にぜひ取り組んで頂きたいところである。なお、新しい人事制度の概要は、研究所Webサイトにも掲載しているので参照されたい。

(<https://www.ims.ac.jp/recruit/torikumi.html>)

(山本 浩史 記)

## 国際研究協力事業報告

### 01 NANOTEC と国際連携協定締結

報告：計算科学研究センター 教授 江原 正博

この度、分子研とタイ王国バンコクにあるNANOTEC (National Nanotechnology Center) との間でMOUを締結しました。調印式は2017年10月30日にNANOTECにおいて実施されました。NANOTECはNASDA (タイ国立科学技術開発庁、National Science and Technology Development Agency) の4つの研究センターの1つであり、11の研究ユニットから成ります。NANOTECは2003年に設立され、比較的新しい研究所です。そのため所属する研究者は若手が多く、研究設備も充実しています。この度のMOU締結の目的は、両研究所の主に研究面における学術交流です。NANOTECには研究者が400名以上所属していますが、学生は少数で外部の大学から委託されています。

MOUの調印式には、分子研からは、川合所長のほか、山本教授、飯野教授、加藤教授、正岡准教授、江原の6名が参加しました。調印式では、分子研の川合所長とNANOTECのChinsirikul事務局長がまず両研究所の紹介を行い、MOUのサインを交わしました。引き続き実施された科学フォーラムでは、分子研のPI 5名とNANOTECの研究者数

名による研究発表が行われ、意見交換などの研究交流がなされました。さらに今後の研究交流に関する方向性も議論されました。その後、NANOTECの研究ユニットを見学するツアーが実施されました。

分子研とNANOTECの交流は、2011年に当時実施されていたEXODASS事業によって開始しました。NANOTECのNano Simulation Laboratory (SIM)の研究員が理論・計算分子科学領域に3ヶ月ほど滞在し、協力研究を実施しました。その後もNANOTECからは分子研ナノテクノロジープラットフォーム事業などを利用して数名の研究者が分子研を訪れ、研究交流が続いています。また、タイ王国で開催される国際学会を通じて、NANOTECの研究者との交流もあり、最近では、物質分子科



川合所長による分子研の紹介

学研究領域とSIMの協力研究にも発展しています。NANOTECでは、上述のとおり11の研究ユニットから構成されており、広くナノ分野の研究が推進されています。この度のMOUが契機となり、今後、分子研とNANOTECの研究交流が益々盛んになり、特に若手研究者の交流が進展することを願っています。



MOUの調印式での記念写真

## 02 オウル大学と国際連携協定締結

報告：光分子科学研究領域 教授 解良 聡

2018年6月に分子科学研究所とオウル大学との間で国際連携協定が締結されました。オウル大学はフィンランドの中部に位置する国立総合大学（1958年創設）で、同国においては3番目に大きな規模を持ち（人文科学部、教育学部、工学部、理学部、薬学部、生化学部、医学部、各専修学院他）、教職員約3,000人に対して約16,000人（留学生は6%以下）が学んでいます。最近は、情報技術、生命科学と健康、文化的アイデンティティ、環境・エネルギー問題を重点推進しているようです。

今回の協定は、放射光施設利用により分子研内のグループと共同研究を進めていたオウル大学のHuttula教授からの依頼が発端となっています。欧州では環境問題を基礎学術的に捉える流れが盛んになってきていますが、同氏は、分子研のUVSOR放射光施設の最新鋭の軟X線イメージング装置（STXM）を利用して、化学的な視点で研究を推進しています。UVSOR施設は設立当初

から「ケミカルマシン」としての位置づけがあり、最近では1 GeV以下の小型第三代放射光施設としては、世界最高性能の高輝度極端紫外光を提供できる施設として国際的に知られています。特に、試料の光照射損傷が深刻なソフトマター関連の研究で長年のノウハウ蓄積による高い優位性をもち、海外ユーザーにも知られるようになってきました。北欧では、隣国スウェーデンが放射光関連研究を大々的に推進しており、最先端の中型第三代放射光施設MAX-IVが稼働し始めています。同施設にはフィンランド分室が設置されており、本協定によるオウル大学との人的交流を通じて、放射光施設間の相互交流強化も視野に入ります。施設としての国際的なピジピリティを高めることも意識していますが、個人レベルでもこれを契機に新たな協同が開始され、これまで以上に研究交流が深められることを期待します。



オウル大学RectorのJouko Niinimäki氏(右)と先方コーディネータのHuttula教授(左)



北欧感あふれるオウル大学の建物（施設職員が訪問時に撮影）